

○河野孝子（西九州大家政）・平田昌（元福岡教育大）

花崎正子（東筑紫短大） ・赤星礼子（佐賀大教育）

【目的】Ⅰ、Ⅱの流れを受けて、Ⅲでは九州の高齢者にかかわる一連の調査研究が、「九州における現在の高齢者の生活実態の解析を通して、今後へのよりよい生活（個人、家族社会）への示唆を得る」という目的を達成でき得たかについての検討と、今後の調査研究に向けての具体的課題について報告する。

【方法】Ⅰ、Ⅱによる。

【結果】①九州における高齢者の生活把握には、地域的、経済的（地帯のもつ経済性）背景や生活慣習（広く文化）などをもつ高齢者という視角が必要であること。

②九州の高齢者に共通する結果をもって一般高齢者論として普遍化できるか（九州の高齢者といえるかどうかの検討も含めて）。

③高齢者をとりまく客観的条件未整備の現状において、高い同居意向にみられる様な、現在までの高齢者の生き方への肯定的傾倒が強く、現状生活への問題意識的発想の無い状況をどう捉えるのか。

④「よりよい生活」の指標作成－生活者の主観的見方と生活に関する客観的水準の統一（家政学の視点による）。

⑤高齢者の「生き方モデル」の作成とその有効性。

⑥高齢者を「生活主体者」と規定した場合の生活の分析として構造的解明の必要性。